



発達しょうがいがある人は、ある分野では非凡な才能を発揮することがある一方で、他の分野では極度に苦手なことがあるという特徴があります。「得意なこと」「苦手なこと」は誰にでもあるものですが、その差が極端に大きいために、生活や仕事の中で困ることがあったり、周囲から誤解を受けることがあったりします。

発達しょうがいは、行動や認知の特性によって主に下記のようなタイプがあります。それぞれの特性を合わせ持つことも多く、現われ方や程度が人によって違うため、一つの診断名に分類することができない場合があります。

知ってほぐす理解

注意欠如・多動症(ADHD)

そそっかしい、集中できない、じっとしてられない、考えずに行動してしまうという特性がある。好奇心旺盛で頭の回転が速く、時に好結果を出す。



限局性学習症(SLD)

知的な発達の遅れはないのに、「読む」「書く」「計算する」といった特定のことがうまくできない。形の似た字を間違える、どこで区切って読めばいいかわからない、漢字を部分的に間違え、「4番目」と「4つ」の意味の違いが理解できないなどがある。



自閉スペクトラム症(ASD)

自分の関心、やり方、ペースの維持が最優先。対人関係で臨機応変に対応することや、コミュニケーションが苦手。記憶力とこだわりの強さから、興味があることへの知識が豊富。



発達性協調運動症(DCD)

日常生活に大きな支障はないが、手と手、目と手、足と手など個別の動きを一緒に行う協調運動が著しく苦手。「片足でバランスをとる」「床にボールを弾ませる」など簡単な運動でも不器用さが現れる。



本ページの例は一例です。症状は多様で、一人ひとり異なります。

発達しょうがいはその言葉のイメージがマイナスに捉えられることが多く、誤解を招くことがあるため、近年、医学的な分類や用語が変わってきており、発達しょうがいを「神経発達症」(従来「〇〇障害」とされていた呼称も「〇〇症」と表記されつつあります)とされています。今特集では、一般に広く知られる「発達しょうがい」の表記とします。

発達しょうがいは、**先天的に脳機能の発達が違う**ことにより、対人関係や学習などの社会生活が困難になることです。

発達しょうがいの特性がある人は、今も昔も少なくとも**人口の約1割程度**はいると考えられています。だとすると、1クラス40人の学級なら3〜4人、職場では部署に数人はいるということになり、実は私たちにとても身近なことだということが分かります。

一定の理解は進んできているものの、発達しょうがいへのイメージは、人によって違いがあるのも事実。

今回の特集では、誰もが安心して自分らしく暮らせるまちを創るため、私たちが発達しょうがいを**正しく「理解する」**こと、**自分自身や親しい人の気になる行動に「気づく」**こと、そして発達しょうがいがある人に**適切に「配慮する」**ことを学びます。



気づいて、知って、支え合う

「発達しょうがい」

自閉症の啓発や支援の意思を示す「リボン」はパズル模様で、自閉症の特性を象徴的に表しています。
パズルのピースの色や形が一つひとつ違うように、人の数だけ個性があります。それぞれのカタチを認め合い、一人ひとりの存在を尊重することで、市民みんなで「暮らしやすいまち」という作品を創り上げましょう。

～参考図書・ホームページ～
 ・「あなたの隣の発達しょうがい」本田秀夫
 ・TEENSホームページ【図表でわかる!】発達障害 × 合理的配慮 |「タブレットの利用はズルい」? 合理的配慮を「不平等」だと感じる人へ

